

## 【退任の辞】

附属図書館長を退任するにあたって

一橋大学附属図書館長・研究開発室長

江夏 由樹

一橋大学附属図書館が所蔵資料の質量ともわたる拡充に努め、利用者へのサービス向上を一層図っていくうえで、2012年4月、図書館のなかに研究開発室が創設され、その機関誌として『研究開発室年報』が刊行されたことの意義は大きい。この『研究開発室年報』の今後のミッションを考えるうえで、かつて刊行されていた附属図書館報、『鐘』の存在を忘れることはできない。研究開発室の『年報』は、『鐘』に期待されていた任務を今に継承することを目指していると言える。

『鐘』は1979年7月に発刊された。当時の木村増三・館長は、その刊行目的は「本図書館の業務や所蔵資料などに関する情報を広く伝えること」にあると記している。同じく、創刊号のなかで、当時の田辺広・図書館事務部長は、本学図書館が文字通り「中央図書館」であるが故の利点と問題点、研究図書館と学習図書館の機能両立の難しさ、施設の狭隘化の問題などを説明している。今年度、関係者の努力により、小平研究保存図書館が設置され、施設の狭隘化問題はひとまず落ち着いたが、田辺事務部長が指摘した諸問題は、現在の図書館がなお抱えている課題である。むしろ、新たな情報化時代への対応、具体的には電子媒体のジャーナル・書籍・データベースなどの急速な普及、その価格高騰などにより、情報拠点としての図書館の直面している問題はさらに複雑・深刻になっており、その解決は必ずしも図書館のみの努力では図れない状況となっている。そうしたなかで、研究開発室が直面する課題を整理・分析し、その解決に向けた議論を提示していくことは大事な仕事となっている。図書館全体の活動の内容を広く情報発信する場として、『年報』の果たす役割は極めて大きい。

一例を挙げるならば、現在、図書館、さらには、大学全体で対応を急がなくてはならない課題の一つに電子ジャーナルの問題がある。この問題はおそらく、近いうちに、本学の研究教育の基盤を大きく揺さぶってくるであろう。電子ジャーナル、さらに、オープン・アクセス・ジャーナルの普及は単に研究成果の発表媒体の変化を意味するだけでなく、学問のあり方そのものに深く関わってくる可能性がある。図書館内部だけの議論にすること

なく、研究開発室はこの問題の重要性を広く大学全体に問いかけていかねばならない。

『鐘』は約27年間にわたり、その時々、その図書館が抱えた問題、その解決に向けた議論を提示し、さらに、本学に所蔵されている貴重な資料・各種展示等の紹介などを積極的に行ってきた。そこにある歴代学長・図書館長を含めた多くの教員、また、図書館の現場で業務に携わっていた館員の記した文章の一つ一つが大変興味深い記録となっている。そこには、図書館だけではなく、一橋大学の歴史が語られていたとも言えよう。残念ながら、この『鐘』は2006年9月に廃刊された。その最終号において、安藤英義・元附属図書館長は「晩鐘に捧ぐ」という一文を寄せ、そのなかで、「しかるに本報は、このNo.50が最終号、いわば晩鐘になると聞きました。一橋大学の学術・文化・伝統が込められた附属図書館の元関係者として、本学の歴史に人一倍誇りを感じている私には、まことに寂しいことです。廃刊にせざるを得ないそれなりの理由はあるのですが、私と同様の感傷を抱く本学関係者も、きっと少なくないと思います」と記している。私もそうした感傷を抱いた一人であった。この『研究開発室年報』が順調に成長を遂げ、かつての『鐘』の担った役割、また、そこに込められていた一橋関係者の「思い」を現在・未来に継承して欲しいと願っている。